

図書館見聞記

佐藤サチ

毎日、図書館にどっぷり首までつかって暮らしている。

数えてみると、図書館で働きはじめてからの年数がそれ以前よりずっと長い。

荷揚町の旧館時代も蔵書目録作成などいろいろあったが、今から見れば牧歌的とも言えるものだった。1995年の新館開館までの準備、それ以後の質量ともに激変した日常業務、おかげでマンネリズムにならず、若い同僚たちの影響で情性にも流されず（流させてもらえず）、言わば末広がりの図書館人生である。発展期・活動期の図書館に居合わせる幸福を感じさせてもらっている。

と言うものの、図書館の日常について書くのはむずかしい。あまりにわが身に密着した話題を未整理のまま書くと、誤解されたりグチになってしまいそうである。

そこで、現実の生活とはかけ離れた図書館について書くことにする。

数年前の初夏、デンマークに行った時、オーデンセという市に宿泊した。オーデンセはアンデルセンの生まれた所で観光地になっているが、同行の長女が友達に会うためでもあった。

コペンハーゲンから特急列車に乗って、途中列車ごとフェリーに乗ったりして（今は橋が開通している）オーデンセに到着。駅前の広い緑地に見とれたり、車道と歩道の間自転車専用道があるのに驚いたりしながら、前日予約したホテルを探しチェックイン。

アンデルセンの生家や博物館の見学をし、夜になって長女の友達ペニールと合流して夕食を一緒にした。

ペニールのお父さんが大学図書館員だということは前に聞いていたが、彼女も今はそこでアルバイトで働いているとのこと。「図書館員なら図書館に興味があるでしょう。もし大学図書館を見たいのなら父に連絡をとりましょう。」この親切な申し出を受け翌日の見学をお願いした。

翌朝、教えられたとおりのバスに乗って十数分でオーデンセ大学に着いた。人口500万のデンマークには大学は数えるほどしかない。オーデンセ大学はそのうちでも歴史の古い大学であるらしい。建物の雰囲気は日本の大学と変わらないように思えた。

入口でペニールが待っていて一緒に図書館へ行き、彼女のお父さんハンさんに会う。

私とほぼ同年配、デンマーク人にしては小柄な方で、穏やかそうな人柄に思えた。編み込みのセーターを着ていたような気がする。

ここでちょっと独断と偏見を言わせてもらうと、図書館員は例外はあるものの、日本人でも外国人でもなにか独特の肌あいというか風合があるように思われる。お互い図書館員同志だと、まず親しみを感じてしまうように思う。

ついでに、服装について一言。図書館員は一般的にラフな恰好をしている比率が高いような気がする。ただし、このハンさんについては例証にはならない。デンマーク人でスーツにネクタイ姿を見たのは鉄道職員だけで、銀行員でさえラフなシャツだった。

ところで、この旅行は仕事とは無関係の個人的なもので、図書館を見ようという心構えもなかったし、大学図書館そのものにも卒業以来縁がない。ものはずみでぼうっと見てきたことで数年たって思い出せるのはあまり多くない。正確さにも自信はない。

図書館は建物の2階を占め、細長い長方形だった。

真中に長い通路がありその両側に書架が直角に並んでいた。

書架は背も高く、今風のゆったりした配置でなく、どちらかと言うと書庫に近い感じだった。

デンマークにもナショナルマークはあるらしい。でも、もしかしたら日本の学術情報センターのようなものかを言っていたのかもしれない。こういう話になると、ペニールや長女の通訳も役に立たない。ハンさんと私がお互い母国語ではない英語で意志の疎通を図ることになり、細かいことはわからない。ただしデンマーク人はほとんどの人が英語を使えるので、これはこちらの責任である。

分類は十進分類法を使っている。私は日本十進分類法を説明しようとしたが、通じただろうか。

オーデンセ大学図書館は電算化されている。しかしカード目録もあるし、端末の数は少ないような気がした。

ハンさんは、カード目録の日本の歴史のところを見せてくれた。時代区分の見出しカード（西暦を記入）が立っていて、彼にこれで間違っていないですかと尋ねられた。「1945～」という見出しカードが立っていたような記憶がある。

本にラベルが無い。請求記号を書いた小さな紙片を見返しの上の方の小さなポケットに挟み込んである（ように記憶している）。

毎日残業で大変だ、土日の当番もあるしと言ったら、一体いつ休むんですかと言われてしまった。デンマークでは労働時間が短い。3週間の夏休みは当然のことだし、公共図書館も日曜日は閉館する（土曜日は未確認）。実際その後行ったフレデリクスハウン市では、日曜日で市立図書館は閉館していた。

ハンさんはとても親切な方だったので、今になって思うと、もっと見るべきものを見、聴くべきことを聴けばよかったのだが、こちらの準備不足の上に、目の前の彼の言うことを理解しようとすることに必死で不十分に終わってしまった。残念至極。

お昼も過ぎたので、ハンさんにお礼を言って別れ、学内の学生食堂で昼食をとった。

学生の人気メニューらしい、じゃがいものスープを食べる。

ペニールとも別れ、またバスに乗ってオーデンセ中心部に戻る。学年の終了の時期で恒例の行事なのか仮装した高校生の一団を見かけた。

ミーハー的図書館見学をこれからも続けていきたいと思っている。

（さとう さち 大分県立図書館）